

2019年8月20日

2019年8月 Nr. 461

さて、今回は伝統のある全寮制学校のプフォルタ (das Internat Pforta) がテーマとして取り上げられています。同校は中部ドイツで最古の教育施設のひとつだと言われています。

さて、ドイツ放送 (Deutschlandfunk) では毎週末、土曜日の午後 11 時 5 分過ぎに始まり、日曜日朝、真夜中の 2 時間後に終了する 3 時間の放送番組があります。3 月 4 日の放送番組は 9 月 8 日の土曜日に再放送されました。そこでは 3 時間、全寮制学校のプフォルタについて取り上げられています。最初の 1 時間では Beiheft にも収録されている通りプフォルタの創立からの 4 世紀間の歴史・歩みについてレポートされ、次の 1 時間はそこに通学していた 3 人の著名なドイツ人について、そして最後の 1 時間はその学校がいかにしてドイツ第三帝国と東ドイツの時代を生き延びてきたかについて、それぞれ取り上げられていました・・・。

プフォルタ校は、修道院が宗教改革後解散された後、1543年に設立されました。その設立資金は、ザクセン選帝侯モーリッツが他の 2 校のためにも併せて拠出しました。それらの学校はそのため王侯学校と呼ばれました。それらの学校はしかしながら、王侯やその子供達のための学校だったわけではなく、両親が子供を通わせるのに十分なお金がないものの、学校に通わせるのに値する有能な少年たちのためのものでした。その学校は 400 年以上の間男子校でしたが、1949 年になってようやく少女たちも受け入れるようになりました。

あるかつての女子生徒は現在、そこで文書係を務めています。回廊、かつての修道院の中心部、学校の中心部、中庭 (生徒にとっては校庭でした) などの案内係も務めています。彼女は学校庭園 (Schulgarten) という言い方の代わりに学校公園 (Schulpark) という言葉を好んで口にします。

彼女は、この学校庭園はドイツにある同種のものの中で最も美しいものの一つであると思っています。その 300 名の生徒のためには十分な場所があるといいます。以前はそこは生徒たちが立ち入ることを許されない純粋な実用園でした。なぜならば、立ち入り禁止にしないとひょっとすると、果物を全く収穫できなくなっただろうからです。1783 年になってようやく、庭園は生徒たちに保養のために使用が許可され、1825 年にはそこから今日の公園施設となります。彼女が最も印象深いと思っているのは、一本のプラタナスの木です。このプラタナスの木の樹齢は不明ですが、実際この木の樹齢が今どれくらいかを探り出す

目的で、年輪を数えるために、伐採することはしないであろうといえます。

19 世紀の 40 年代までは生徒たちは食事の際および寝室でもラテン語のみで話しました。上級生は下級生の手助けをしなければなりません。現在ライプチヒ大学の私講師を務めるヨナス・フレッター (Jonas Flöter) 氏は、補習授業は受ける人より行う人にとってずっと役に立つという見解です。同氏は 2018 年、この学校についての 187 ページの本をライプチヒ大学出版局より出版しました。

シュメルン (Schmölln) では長い間、ベネディクト会修道士たちの大修道院が存在しましたが、1132 年にシトー会修道士たちの大修道院も加わりました。しかしながら、シトー会修道士たちはそこに 2, 3 年しかおらず、彼等の修道院と共にプフォルタへやって来ました。そこで 1137 年、彼等の新しい修道院を建造しました。ベネディクト会修道士たちは当時、評判が良くありませんでした。一方で、シトー会修道士たちはその敬虔な行状・品行により至る所での評判が良かったのです。シトー会修道士たちは、ザーレ川およびウンシュートルート川の岸辺にブドウの木を最初に植えました。こうしてドイツのブドウ栽培の北限地帯が誕生しました。

当時の修道院付属の教会では今日、コンサートや他のイベント、特に新入生のための学籍登録式典も開催されます。1543 年以来 2 万人の少年たちが、そして 1949 年からは 2~300 人の少女たちも学籍簿に登録されてきました・・・。

さて、プフォルタ校のウェブサイトを開覧すると、プフォルタ校は現在、全寮制ギムナジウムとして運営されていることが分かりますが、同校創立の 1543 年は、当時日本では戦国時代で、ちょうどポルトガル人が鉄砲を日本の種子島に伝えた年にあたります。因みにザビエルがキリスト教を伝えたのが数年後の 1549 年。そのザビエルで思い出されるのが、彼によって日本最大の大学として世界に紹介されたのが日本の足利学校です。これらを考えると、時代のイメージが頭により浮かんでくる気がします。洋の東西を問わず、ほぼ同じ頃に学校が誕生していたり、盛んだったたりしていたのは興味深いです。

また、プフォルタ校の創設者の精神は、両親の社会的地位や収入に関係なく有能な生徒を支援するために、現在の運営主体であるザクセン・アンハルト州にも受け継がれ、費用は毎月 350 ユーロ (同州の生徒は 250 ユーロ) で済むということです。更に生徒には他の基金からさらなる資金援助も受けられるといえます。

放送によりますと、プフォルタ校ではかつて、チューターシステムがあり補習授業により上級生が下級生を教えていましたが、教授が教えるより理解が深まるといえます。また教

える上級生も同時に伝達能力の練習になるということです。それに加え補習授業では授業を受ける下級生よりも、補習授業を行う側の上級生により役に立つといいます。私自身はチューターシステムを経験したことはありませんが、学んだ内容を今度は別の人にできるだけ分かり易く伝えたりすることにより、自分自身の知識としてよりしっかりと身につくという経験はしたことは有り得ると思いますし、日常生活の中でも、本で読んだり、見聞きした内容を第三者に自分の言葉で伝えることにより、その内容が自分の記憶により残りやすいということも経験していますので、ここは納得できる点でした。

Pforte (古高ドイツ語では pforta) は、Beiheft によるとラテン語で「門」を意味する porta に由来するそうですが、この porta という語を聞いて、学生時代に初めて訪れたトリーアにあるポルタ・ニグラ (「黒い門」) を思い出しました。またその壮大な印象を受けると同時に、旅行ガイドブックの解説と実物とを見比べていた自分も併せて思い出しました。

今回 Beiheft に収録されているのは、課題冒頭で紹介されている 3 時間の放送の内の最初の 1 時間に相当する部文です。そして次の 1 時間ではその学校に通っていた著名なドイツ人であるクロップシュトック、フィヒテ、ニーチェの 3 人について特集されているとのことでしたが、インターネットで検索してみるとその他にも数多くの学者、政治家、医師、作家などがこの全寮制学校に通ったことが分かりますので、やはり相当な名門校であることが窺われます。

ところで、シトー会修道士たちがザーレ川などの岸辺にブドウの木を最初に植えたことが、その後のブドウ栽培の北限地帯の誕生に繋がったという経緯を知ることができて興味深かったですし、旧東ドイツのザーレ川付近でブドウの栽培がなされているということは知りませんでした。ドイツでのワイン用ブドウの栽培は、もっぱらライン川やモーゼル川付近とフランケン地方など旧西ドイツで行われているというイメージが私の中ではありましたが、ザーレ川近辺だけでなく、さらに調べるとエルベ川付近においてもブドウ栽培がなされていることも知り、ドイツワインの産地についての認識を新たに致しました。

K. K.

2019年9月21日

2019年9月 Nr. 462

さて、今回は自殺 (Selbstmord, Suizid) がテーマです。そしてそのテーマが様々な観点、すなわち宗教、歴史、哲学、ウェルテル効果 (Werther-Effekt)、自殺者の残された家族、自殺者の推移、他の死亡原因との比較などの観点からレポートされています。

ユダヤ教徒およびキリスト教徒には第五戒である「あなたは殺してはならない」が適用される。4世紀にアウグスティヌスは、これは自分自身も殺してはならないということを意味すると語った。従って、自殺した人間は、キリスト教式の埋葬をできませんでしたし、キリスト教の墓地に埋葬することが許されませんでした。ルターは、自らを殺す者は自殺をすると言いました。18世紀および19世紀においてはまだ、大抵の国では、自殺を試みた場合、すなわち自分自身を殺害したものの、自殺未遂に終わった場合は、処罰されることが普通でした。自殺未遂に対するこの処罰の威嚇は、イギリスではまだ1961年まで存続し、またイスラエルでは1966年まで存在しました。

Selbstmord または Selbsttötung という言葉を口にする代わりに、ラテン語由来の Suizid と表現するが好まれます。これは、人が木を切り倒すように人間が自分自身を殺害するということを意味しています。1983年まではカトリックの司祭は、自殺者をキリスト教式に埋葬することを拒絶することができました。というのは、聖書には自らを殺害してはならないということについて全く言及していないにもかかわらず、アウグスティヌスが第五戒を解釈したことが、一般に受け入れられていたからです。それにもかかわらず、聖書では自殺者の中にも肯定的に評価できる好ましい人物たちも見受けられます。例えば、パウロがヘブライ人に宛てた手紙の中で信仰の英雄として描かれた英雄と呼んだサムソンです。

ドイツでは自殺による死亡者が暴力犯罪、交通事故および違法薬物などによる合計の死亡者数を上回ります。2016年には、自殺と確認された死亡者は1万人を超えました。この数字は、交通事故による犠牲者数の3倍でした。しかしながら、ドイツでは現在、自殺者の数は40年前に比べ半減しました。つまり、1945年から1985年まではドイツ人100万人当たりで年平均220人から240人の自殺による死亡者がいました。精神科医および心理学者は、この減少は精神的な病気に対する診断学が改善され、治療法が改善され、さらには予防をよりするようになったことによると説明していますが、さらには、精神的な病がもはや、できれば話したくないもの、つまりもはやタブーテーマではなくなっていることも一因であるといえます。

自殺のリスクは若者層において特に高く、その後の年齢層で減少しますが、高齢者層において再び増える傾向にあります。年を取ってから人生がますますつらく、精神的に苦しくなる場合、倫理上そのため自殺故に非難されることなく自らその人生を閉じることを許されなければならないと言う人が多いといえます。自らの死に対する権利があるといえます。このことについては、すでに古代において議論されていました。プラトンはそのような権利を認めませんでした。プラトンは、人は自分自身のものではなく、従って自分の生命を意のままにすることは許されないといいました。しかしながら、ストア学派の哲学者たちは、長く生きることは必ずしも良き人生に必要なものではないと主張します。 貧困や飢餓に苦しんだり、病気や痛みに耐えたりしなければならない者は、自由意志により自らの人生を閉じたいと考えてもかまわないといえます。

子供または若者が自殺をすると、それはその両親にとっては耐え難いものです。愛する人間が死亡しますと、それはどのみち痛ましい経験ですが、両親が自分の子が自殺することを経験すると、そのことは両親にとっては心の精神的な傷害のようなものとして残ります。なぜならば、たとえその子供が別れの手紙を書き残したとしても、両親は、ひよっとしたらその自殺に対し自分たちに責任の一端があるかもしれない、そして自分たちがその子供の面倒をもっと見てやるべきだったという考えから離れられないだろうからです。

人が自殺する場合、大抵はその人の自由意思による決断ではなく、長い苦悩苦しみの終わりです。両親にとっては、子供の自殺は、自分たちが子供の苦しみに気づかなかつたり、または気が付いても何もしてやれなかつたりした場合、特に辛く、やりきれないものです。

クリスティアン・ベッカー (Christian Becker) さんは、自殺したとき 24 歳でした。彼の父親にとってこのことは身を隠したいほどつらかったといえます。なぜならば、父親は、親戚や知人たちが責任の一端を父親自身になすりつけているという感情を抱いたからです。父親は息子の後を追って自殺することさえ考えました。そうこうするうちに両親は、息子の死を受け入れるようになりましたが、母親は自分の夫なしにはできなかつたろうといえます。教会での葬式のために、両親は教会音楽に加え息子の大好きな歌の一つも選んでいました。それはドイツのロック・バンドのラムシュタイン (Rammstein) の „Ohne Dich“ (♫Ich werde in die Tannen gehen..) という曲でした・・・。

さて、今回の放送および課題においては自殺についてさまざまな観点から取り上げていましたが、知らなかった点、驚いた点が多かったです。例えば、18 世紀、および 19 世紀では自殺未遂者が刑罰を受けたこと、キリスト教では自殺者をキリスト教の墓地に埋葬されることを許されなかつたこと、しかもこの慣行がイギリスでは 1961 年まで、イスラエル

では1966年まで続いたこと、自殺者の埋葬が義務化されたのが1983年になってからだったことなどです。二千年という長い歴史を考えれば、イギリスおよびイスラエルでのこれらの慣行廃止や自殺者の埋葬義務化はつい最近の出来事だと言えます。また、娘が車に身を投げて自殺した際、その娘の母親が、車の所有者から車の損害賠償を請求されたり、列車に身を投げた子供の母親はその自殺によって心的傷害を負った列車の運転士（Lokführer）への医療費の負担を求められたりしていることには大いに驚きました。肉親の命が奪われただけでなく、さらには損害賠償という費用負担を強いられるというのは二重の苦しみ・悲しみと言えます。

また、放送および課題では、クリスティアン・ベッカーさんが24歳で自殺した際に、父親は後追い自殺まで考え、しばらくの間は辛い日々を送っていたことに触れています。息子を突然失った悲しみを感じるだけでなく、自殺の責任が自分にもあると親戚や知人から感じていたためそのような気持ちに陥っていたのだらうと想像します。この時の苦しみは相当大きかったらうと想像します。

ところで、ドイツと日本の自殺者推移について大雑把に比較すると、概ね以下の通りとなります。放送および課題においてドイツの自殺者数の情報（1945年から1985年まで人口100万人あたり220から240人、2016年の自殺者数は1万人超）について触れていました。WHO資料によると、ドイツでの自殺者は1990年には約14,000人でしたが、以降は放送および課題で紹介の通り、1万人前後で推移しており、全体を通じては緩やかな減少傾向が見られるといいます。一方、日本では1990年から1997年までは2万人超で推移していましたが、1998年以降急増し2011年までは約3万人と高止まりの状態が続き、2012年以降は減少傾向になり2016年は21,897人でした。日本のほうがドイツより人口が多いため自殺者も多くなりますが、自殺死亡率（人口10万人当りの自殺死亡者数）で比較しても、2014年に関してはドイツが約13に対し、日本が約20と日本が高いようです。

さて、今回の自殺というテーマで思い出すのは、今年6月初め、神経の難病を患っている50歳代の日本人女性の安楽死を扱ったNHKのテレビの番組です。外国人の安楽死を認めているのがスイスでしたので、彼女は事前にスイスの安楽死団体（Nr. 438で紹介された団体のようです）に申し込みをし、4条件（耐え難い苦痛がある、回復の見込みがない、代替治療がない、本人の明確な意思がある）を満たしていることが書類上確認された上で2人の医師の面接を通じて本人の意思確認を経て安楽死をするというものでした。番組では安楽死の前後を撮影した内容が放送され、大きな衝撃を受けました。また、日本では安楽死が認められていないため、一緒に渡航した姉たちは安楽死した妹の遺骨は日本に持ち帰れないとのナレーションが流れたのにも、驚きました。彼女の場合、今回の放送・課題に登場するクリスティアン・ベッカーさんの自殺と明らかに異なっているのは、自殺の理由が明確で

あったこと、そして家族にも葛藤、苦しみそして悲しみもあったと思いますが、ある程度納得感があることではないかと思います。

Beiheft にも記載されております通り、ドイツでは 2015 年 11 月、議会において自殺幫助法改正に関する 4 法案について審議されましたが、いずれの法案も可決されず、「業務として (geschäftsmäßig)」行った場合、罰せられることが決定されということです。この 4 法案の内容に関しては改めて調べてみようと思います。

K. K.

2019年10月24日

2019年10月 Nr. 463

さて、今回は、「建設的な批判」がテーマです。

誰かを批判することは大抵、両者、つまり批判される側と批判する側共に楽しくなく、喜びをもたらさないものです。従って、非常に重要なのは、その場合決して個人攻撃になってはいけないことです。会社の上司は、自分の部下を批判しなければならないときがありますが、社員たちも自分たちの上司を批判する機会を与えられるべきです。というのは、適切に行われた批判は、非常に有益であり得るからです。人は誰かを批判する前に、まずは肯定的なことを言うべきであるといえます。これは、何か批判すべき点に言い及ぶ前に、ほめることができることについてよく考えなければならないということを意味します。批判するべき理由が全くない場合でも、互いにどう考えているか、時々話すべきです。

本番組の取材記者のシールケ (Schielke) 女史は、時折社員は相互に評価する機会を持つべきであるという意見です。業績をあげる者は、自分の業績について他の人からどのように評価されるか知りたいと思っています。社員にとって殊に重要なのは、上司が自分の業績をどのように評価しているかを知ることです。従って、多くの企業では毎年恒例の従業員面談があります。上司はそのために多くの時間を割き、どの従業員とも個別にその業績、つまり従業員の担当業務の結果それにその従業員の同僚たちとの共同作業についても話さなければなりません。

フルトヴァンゲン大学のトロースト (Trost) 教授は、毎年恒例の従業員面談はしかしながらもはや有意義ではないと考えています。というのは、これには莫大な時間を要するためだといえます。具体的に言うと、その時間は企業が必要とする労働時間です。

ヴェルナー (Werner) 女史は、フォルクスワーゲン社役員会において Recht und Integrität (法務と高潔性) を担当しています。20年前に人から彼女は高圧的 (居丈高) な態度の度が過ぎるところがあるとちょっと言われたことがあります。そういった性格は確かにリーダーシップの一つですが、その高圧的 (居丈高) な態度が度を過ぎしてはならないといえます。ヴェルナー (Werner) 女史は、しかしながら、エネルギーでなければならず、2015年に発覚した排ガス規制不正問題後、フォルクスワーゲン社においてはこのようなことが二度と起き得ないよう注意するために勇気を持たなければならないのです。

ヴェルナー (Werner) 女史は、本番組の取材記者シールケ (Schielke) 女史をヴォルフスブルクのフォルクスワーゲン社の本社最上階で迎え、シールケ女史とは、自分の役目として不都合なことについてもオープンに話すことを従業員に教えなければならないことについて語りました。従業員たちは、共に考え、共に議論し、自分の意見を述べることは価値がある、無駄ではないということを理解しなければならないといっています。

この考え方により、ヴェルナー (Werner) 女史は、味方を得ただけではなく、フォルクスワーゲン社役員会のメンバーの中には、何か批判すべきことがある場合に従業員に口を開く勇気を持たせるために、彼女の行っていることのいくつかには同意していない者もいるといっています。この排ガス規制不正問題はすでに十分由々しき事態でした。しかしながら、彼女にとって最悪のもののひとつは、この問題が10年間も表沙汰にならなかったことです。それは、長すぎる期間でした。その間にそれに対し何かなされると明確に指摘する勇気を誰も持たなかったからです。誰もがこの不正問題について発言する勇気がなかったといっています。これは変えなければならないし、実際変わったといっています。

批判は個人攻撃になってはいけなし、批判を個人攻撃として受け取ってはなりません。批判は学ぶものです。人は批判を受け入れ、耐えることができなければなりません。これはきついものです。従って、フォークトレンダー (Voigtländer) 女史とグロザルスキー (Grosalski) 氏は、受講者が批判を客観的に述べることにより、労働に対する動機付けを高め、生産性を向上させ、企業の財政面での成果を改善することを学ぶべきセミナーを提供しています。

その場合、特に感情を正しくハンドリングすることが重要であるといいますが、これを習得することは大抵の人にとって非常に難しいといっています。誰かを批判する代わりに、批判しようとする内容をその人に指摘することだけにとどめるべきです。例えば、マイヤー (Meyer) さんという人がいたとしましょう。彼は時間を守らない、時間にルーズだといって非難する代わりに、彼がどうしてしばしば遅れてやって来るのか、例えば彼はひょっとして仕事が多すぎるのではないかとか、そして人が何をできるかとかを彼と一緒に考えるように努めるべきであるといっています。

ある人材コンサルティング会社は2016年、従業員の24%は自分の上司がから次のような命令口調で指揮・指示されていることを経験していることを調査の結果確認しました。つまり、「上司は正しい、よって部下は服従しなければならないのである」という論理です。グロザルスキー氏にとっては、この考え方・論理は、部下は単に機能しているだけでよいのであって、部下が良い結果に至る方法について自身で良く考える必要はないということの意味するといっています・・・。

さて、会社の上司による命令口調の指示については、遠い昔、ドイツの子会社に勤務していた頃、私も何度も見聞きしています。かつて複数のドイツ人トップが彼らの部下たちに対し行っていた時の指示は強い口調、ジェスチャー、顔つきなど、日本の親会社の場合と明らかに異なっていましたし、これがドイツ人トップのスタイルなのだろうという印象を持っていたことを思い出します。もちろんこのような個人的な経験を一般化することはできないと思いますが、ドイツ人トップたちが典型的なドイツ人幹部のやり方を体現していたような気がします。今回の放送および課題によると、ある人材コンサルティング会社の調査によるとそのようなことを経験している従業員は 24%であると判明したということでしたが、上記の私の経験から考えますと、この数字は意外に低いという印象を受けました。それとも時代の変化を反映し、ドイツにおいても命令口調の指示が減ってきているのでしょうか。

「批判する時には感情を排す、まじえない」ことが重要であるということですが、人が誰かを何らかの理由で批判する際には、批判するだけでなく、しばしば非難する傾向にあるのではないかと思います。そして多くの場合、感情が込められる傾向にあります。従って、感情を排することは一般的には相当難しいだろうと思います。

今回の放送で登場する (Beiheft 5 ページ) kritikfähig という語は、手元の独和辞典 (Duden Deutsches Universalwörterbuch) によると、1. fähig, Kritik zu üben (批判する能力がある) と 2. fähig, Kritik zu akzeptieren, zu ertragen (批判を受け入れる能力がある、批判に耐える能力がある) の二つの意味があると記載されていますが、今回は文脈から考えると 2 が該当すると思われます。~fähig は、動詞・名詞などにつけて「・・・が可能な」「・・・の能力のある」という形容詞をつくりますが、このように一つの語句が受動的な意味と能動的な意味を持つというのもおもしろいと思います。尚、手元の 3 冊の独和辞典には kritikfähig は掲載されていませんが、これほど重要で、かつ一般的な語と思われるものが何故独和辞典に見出し語として掲載されていないのか不思議です。次回改訂の祭には、是非例文と共に掲載して欲しいところです。

K. K.

2019年11月26日

2019年11月 Nr. 464

さて、今回はロマネスク街道が話題となっています。

ロマネスク街道は、ザクセン・アンハルト州の73箇所を通過して1,000キロの道のりを辿ると旅行者が行き着く88の建造物を紹介する目的で1993年に創設されました。旅行者向けの地図ではこのルートは八の字の形をしており、北半分の北コースと南半分の南コースがあります。

その南コースの修道院はかつてどこでも自前のブドウ畑を持っていました。当時のシトー修道士の修道院であるPforte（またはPfortaとも言います）は1543年に全寮制のギムナジウムになりましたが、その近くでは1人の若いブドウ栽培業者が急勾配の斜面にブドウ栽培を営んでいます。ブドウ栽培という職業は、彼にとって農作業であるばかりでなく、1,000年も続く人工の自然景観の中、ブドウ畑の中で手を汚したり、ブラックベリーの茂みから再度ブドウの木を解放してあげたりすることを改めて意識することでもあります。広大なブドウ栽培地域では多くのブドウの木は畑地で栽培されるのに対し、ザーレおよびウンシュトルートではモーゼルと同様にブドウの木が丘陵斜面のブドウ畑で生育します。

ロマネスク街道の創設と共に、ザクセン・アンハルト州の観光連盟は、観光産業のために大変力を尽くしてきました。今年年間来訪者数は160万人になっています。ヴェルニゲローデの大学のツーリズム研究の教授であるドライヤー（Dreyer）氏は、このようないわゆる街道は、その地域が多くの人々にとってまずは興味深いものとなるといいます。なぜならば、多くの人はそのテーマにより多くのことについて注意喚起されるため、指摘されなければひょっとしたら見物しなかつただろうと思われるからです。

ロマネスク様式の典型的な特徴は、ゴシック建築様式の尖頭アーチとは対照的に、際だった半円アーチです。ロマネスク様式と呼んでいるのは、東部の、すなわちエルベ川の向こう側のザクセンの異教徒民族のキリスト教徒化が問題になっていた頃、西暦900年から1300年の間の時代の初期キリスト教のローマ風建築様式です。当時、皇帝や王様たちは、そこでキリスト教への改宗の基盤として多くの修道院や教会を設立しました。しかしながら、当時生まれたのは建築様式だけではなく、絵画や彫刻の特別な様式も育ちました。

ロマネスク街道について話すことは、観光客にとっての刺激・励みとなっているだけでは

なく、そこに暮らす人たちの連帯感の強化にも一役買っています。しかしながら、人を取り囲む文化に対する責任感は常に存在していました。1985年の例は、後に自らを信徒修道士と呼んだ14人から成る市民グループです。彼等は中世最盛期の修道院施設を崩壊から救いました。彼等がこれに成功していなければ、現在、人は修道院の廃墟の前で佇むことになったでしょう。その建物は、ベネディクト修道会の女子修道院でしたが、1085年から1110年の間に建設されたものです。

この修道院所属の教会は、広範囲を見回しても現存の最古の教会建造物と見なされています。ロマネスク様式の教会は高い山の突出部に建っています。教会の塔の金色の十字架は遠方からでも見るすることができます。下では幾重にも曲がりくねったウンシュートルート川が流れています。向い側には付属テキスト28ページの写真で見られる城が建っています。この城はいまだに城壁のように見えます。というのは、その城壁は1450年になってようやく居城に建て替えられた1170年の城壁だったからです。その周囲には果樹の草原、ブドウ畑それに森があります。この城、というより城壁と表現したほうがよいかもしれないのですが、これはロマネスクという観光街道の一部ですが、観光客向けのガイドブックではかなり後のほうに掲載されています。

1,000キロに及ぶ長さのルートでは1,000年に亘るヨーロッパの歴史、例えば、修道院、村の教会から城壁、大聖堂や皇帝の城、言い換えれば当時の支配者の拠点までを体験できます。この支配者たちは、そこへはイタリアから特に好んでやって来ました。しかし、自分たちの時代が終わると、この地域では新しいものがほとんど生まれませんでした。このことは、多くのものが以前と同様のままだったことを意味しました。従って、そこではロマネスク様式や初期ゴシック様式の時代の古い教会は殆どそのまま引き続き保たれました。

大抵の村や小さな街で宿屋やレストランが時折働き手不足のために閉鎖されていることがあります。そうでなければ、ひょっとしたらもっと旅行者がやって来るかもしれません。比較的大きめのホテルもなく、田舎ではしばしばGasthaus（料理店）さえも見つからない状況にあります・・・。

さて、ドイツの「〇〇街道」といえば、日本ではロマンティック街道が最も有名だと思います。私自身もかつてのドイツ勤務中に数日かけてこの街道を車で走ったことがあります。「〇〇街道」について改めてWikipediaで検索してみると、ドイツでは何と150以上も存在するようですが、その数の多さには驚きました。私が認識していたのは、ロマンティック街道の他は、ゲーテ街道、古城街道など数個しかありませんでした。さらに付け加えれば、今回のロマネスク街道についても全く聞いたことさえありませんでした。また、これらを総称して日本語では一般的には「ドイツ観光街道」（この言い方も初めて知りました）

と表現するようです。また、これに対するドイツ語は Ferienstraße, Touristikstraße, Themenstraße, Fremdenverkehrsstraße, Touristenstraße などと、さまざまな表現の仕方がある旨の記載がありました。

ところで、この番組の取材記者がある若いブドウ栽培業者の日常の農作業をしているブドウが栽培されている山と一緒に登りました。息を切らし、汗をかきながら登った山から眺めるザール川からの景観について einzigartig と描写していますが、何となくこの情景が目には浮かぶようでした。そして、その若いブドウ栽培業者の目標は、いわゆるワイン通から „Moselgebiet des Ostens“ (「東部のモーゼルワイン地帯」) という評価を得ることだと紹介されているのが印象深かったです。

さて、今回の放送および課題においてさらに印象深かったのは、修道院教会を修復再建したボランティアの 14 人の信徒修道士の活動です。インターネットで検索してみたところ、修道院教会のホームページに辿り着き様々なことが分り勉強になりました。ホームページではまた、15 枚の修復再建作業の写真も掲載されており、生々しい作業の一端が窺われます。聖ボニファティウスというこの修道院教会の再建作業は 1986 年から 1994 年の 9 年余りの期間に行われたといますから、ちょうど旧東独の時代に作業がスタートし、統一ドイツになってから完成したことになります。旧東独時代にこのような修復再建作業が行われたこともまず驚きますが、その莫大と思われる費用をどのように工面していたのでしょうか。いずれにしても、14 名のボランティアの使命感には敬意を表さずにはいられない気持ちになりました。また、ここではしばしばコンサートが行われており、修復作業前の最初のコンサートは 1985 年に野外で行われたといます。1994 年 11 月 13 日にはミサを行い、修復再建作業の完成を祝福したということです。

ところで、今回 das mit Y geschriebene Freyburg という表現が登場します (私は当然 Freiburg は知っていましたが、Freyburg という地名は初めて知りました)。この表現は、ある単語の発音が同じで綴りが異なる場合に、応用できる表現だと思いました。ドイツ語圏でよく出てくるマイヤーという姓名は、Meyer や Maier などと綴りますが、これにも応用できそうです (会話の場合、単に „Meyer mit Y“ と表現するのを学生時代に習ったことを思い出しました)。もっとも、マイヤーさんの場合、この他にも Mayer や Meier その他もありますから、i と y だけでなく、更に a や ei の区別も必要になってきますので、ちょっと複雑です。ドイツ語圏の人はどのように区別しているのでしょうか。

K. K.

2019年12月22日

2019年12月 Nr. 465

さて、今回は、母親の死が遺された娘・息子にどう影響したかがテーマとなっています。そして、番組では母親の死を経験した二人の女性のその死の前後の心の動きが紹介されています。その内の一人は本放送の執筆者のシュトレローさん (Frau Strelow) であり、もう一人はショルツさん (Frau Scholz) という女性です。その他にも番組ではペーターさん (Herr Peter) という男性も紹介され、劇的とも思える母親の死の経緯が生々しくレポートされていますが、前述の二人の女性の場合とは異なり、死後の心の動きの描写はありませんでした。

さて、母親の死は、多くの人にとって同時に自身の幼年時代の終焉でもあります。つまり二重の意味での別れ・離別です。放送の執筆者であるシュトレローさんは、自分はまもなく60歳になると語りますが、3年前に母親が亡くなったとき、自身は55歳で兄は60歳だったとも話します。一方、ショルツさんにとっては母親の死はもう12年前のことですが、ペーターさんにとってはまだ2年前のことです。

ショルツさんは、12年前に母親がまた手術しなければならなくなったとき、あまり心配はしていませんでした。母親は65歳でしたし、手術も順調に進みました。ところが、気管切開が行われ、その後人工呼吸器が取り付けられ、昏睡状態に陥り、二度と目を覚ましませんでした。そして1ヶ月後、母親は死亡しました。このことはショルツさんにとって、まるで自らも一緒に死亡したように思えたといいます。

ショルツさんは常に、自分の母親の娘であり続け、自分の姉妹の妹 (または姉) であり続けましたので、健全に成長したとは決して言えませんでした。母親との関係が余りに親密でしたので、ショルツさんはみずからの人生を生きることを妨げられてきました。12年後もなおショルツさんは、母親と結びついており、愛情を受け入れるという難しさを持っています。ショルツさんは、母親を愛情探求者・求愛者として見なし、それは自分にも当てはまるということを徐々に受け入れつつあります。

母親の死後、ショルツさんにとって初めて、深い悲しみと絶望の長い段階がやって来ました。しかしながら、いつかあるときにそこから強さの感情が生まれましたが、その感情がそのままずっととどまることはないといいます。ショルツさんは、母親のことを思うとき、単にはほえみ、喜ぶことができるような日々もある一方で、単に母親のほうに向かおうとする日々もあります。ショルツさんは、自分には子供や姉妹もあるものの、自分が一人き

りであることを今、自覚しています。ショルツさんは、母親を自分自身の中に抱えているという気がしていますし、母親が存命中、自分が母親を愛していることを母親に表現することがあまりに少なかったと言います。ショルツさんは今、そのことを後悔しています。

シュトレローさんは、母親の亡くなる場に居合わせることはできませんでした。というのは、母親がシュトレローさんに対し電話で、日に2回母親のところにやって来る看護師が救急医に知らせてくれ、その救急医が母親を病院に連れていくことを告げたとき、シュトレローさんは大きな心配はしていなかったからです。シュトレローさんは母親を見舞いに病院を訪ね、母親のベッドのところに腰を下ろし、母親の手を取りました。その時シュトレローさんが感じたのは、母親が恐らくまもなく死を迎えるだろうということでしたが、母親の死は1, 2年先のことだろうと考えたと言います。そして、これまでもそうだったように、3日経てばまた家に戻ってくるだろうとシュトレローさんは考えたと言います。

ところが、その晩、シュトレローさんは兄から電話をもらい、母親の具合が悪い旨、病院から電話があったと兄から言われました。シュトレローさんは兄を車で迎えに行き病院へ向かいました。しかしながら、二人が病院に到着したときは、母親は既に亡くなっていました。その時シュトレローさんは自分が母親の所に居てやれなかったことを後悔しました。今や母親の手はもう冷たくなっていました。それにもかかわらず、シュトレローさんはまるで母親を安心させるかのように母親に何かを話しかけました。シュトレローさんにとっては、すべてが突然止まっていました。シュトレローさんは、自分は母親なしにこれからどう生きるべきなのだろうかと自問しました。

子供のときシュトレローさんは、母親がいないのを寂しく感じていました。なぜならば、両親がお金を稼ぐために、祖父母に預けられていたからです。シュトレローさんは不幸だったと感じていましたし、母親は後にこのことを恥じていました。しかしながら、そうした後で、母親とシュトレローさんはこの幼い頃の10年間になすべきなのにできなかったことの埋め合わせをしました。二人は親密で仲のいい関係を築きましたし、二人が話せないことは殆どありませんでした。

しかしながら、母親の体が弱ってきて、ますます助けを必要とするようになったとき、シュトレローさんは母親が自分に過大な要求をしているように感じました。そこで、シュトレローさんは看護師に日に2回、母親の面倒を見てくれるよう頼みました。しかしながら、シュトレローさんは罪悪感を抱きました。いつそのこと母親から早く解放されればいいのにとさえ願ったことも時にはありました。そして一方ではそのことが原因で泣いてしまいました。なぜならば、自分がそのようなことを考え得たことに対し恥さを感じたか

らです。

母親の葬儀は、彼女の母親の多くの友人たちとお別れ会であると共に思い出の会でもありました。シュトレローさんは、経験していることや考えていることなどを母親に報告したいと思うほど、今日まで自分が母親ととても近い所にいると感じています。シュトレローさんはしかしながら、同時に自分が解き放たれているとも感じています。シュトレローさんは今や、もはや母親の娘ではなくなり、妻であり、母親であり、そして祖母という存在になりました・・・。

さて、今回のテーマは「母親の死」ですので、放送では（従って課題においてもですが）父親については言及されておりません。母親が亡くなった場合、父親が存命であれば、悲しみを分かち合い、母親についての思い出について話すことなどが普通だと思いますので、放送でそれに触れていなかったのは、母親の死がその後の娘または息子にどのように影響を与えたかというテーマを扱っているため、父親に関しては登場しなかったものと思われると思います。それとも既に父親が他界しているため登場しなかったのでしょうか。ショルツさんの場合、母親がまだ 65 歳の若さで亡くなっていますので、そのショックは相当大きかったのではないかと想像します。また、ペーターさんの場合は、母親が 80 歳と高齢ではあったものの、比較的健康で自立して生活していたといえます。そしてそれまでは約束した時間通りに必ず姿を現していた母親がその時は、約束したランチに来なかったことから自宅での死亡が確認されたといえますから、そのショックはやはり大きかったと思います。

シュトレローさんのように介護に苦悩する人々の話やペーターさんの母親のように死後発見される独居の高齢者の話は日本でも同じだと思いました。介護の辛さ・むなしさ、それに介護疲れに耐えきれず殺害や虐待をしてしまったり、死後しばらくの間を経てから一人住まいの高齢者の遺体が発見されたりするというニュースも残念ながら日本でもたびたび報道されます。この種のニュースを聞くたびに本当に暗澹たる気持ちになるのは私だけではないと思います。

ところで、放送で登場するペーターさんという男性の名前ですが、このペーターさんはファーストネームではなく姓名として使われています。私はファーストネームとしてのペーターという名前は今回初めて聞きました。これと同様に、例えば作家のギュンター・グラス (Günter Grass) のように、それまでギュンター (Günther または Günter) という名前もやはりファーストネームとして知っていましたが、私の 30 年近く前のドイツ勤務時代に会社にギュンターさん (Herr Günther) というセールス担当責任者がいたことにより、ギュンターは、ファーストネームとしてだけでなく姓名としても使用されることがあることを当時初めて知りました。ファーストネームと同じ綴りの語または発音が姓名とし

て使われる例は他にもまだありそうです。また、姓とファーストネームが同じ綴りまたは発音の事例は日本語にもありますが、例えば、真弓（まゆみ）、恵（めぐみ）、南（みなみ）などが思い浮かびます。おそらく他の言語でもあるのだろうと想像します。

K. K.